

田植えの1ヵ月後に中干し溝切りを行います!

■中干しの効果

土壌に酸素を供給し、根を活性化させます。また、過剰な分げつを抑制することにより、風通しを良くし、光が株元に届きやすくします。また、モミ数が制限されることから、粒厚が厚く、整粒歩合の高いお米ができます。軽く足跡がつく程度で、約2週間程度の中干しを心掛けてください。

中干し時期の莖数(コシヒカリの目安)

栽植密度(／坪)	50株	60株	70株
1株当たりの莖数	20本	17本	14本



■溝切り

- 溝切りを行うことで、入水・落水がスムーズ(効率的な水利用)に行え、胴割米の防止と粒厚の向上につながります。
- 確実な溝切りにより、地耐力が増し落水時期を遅らせることができるので、今後のカドミウムの吸収抑制(湛水管理技術)に効果があります。
- 10aあたり1本以上の溝切りを原則実施し、溝は尻水戸までしっかりつなぐようにしましょう!



麦・大豆栽培につながる溝切り作業

水稲跡に麦を作付けされる場合、溝切りした溝が、麦の播種前の排水対策にも有効に活用されます。収穫時にコンバインで溝をつぶさないようにしましょう。

環境負荷軽減に向けての中干し

■中干し期間の延長によるメタンガス排出削減

農林水産省策定の「みどりの食料システム戦略」のなかで、2050年までに、地球温暖化の原因である、農林水産業の温室効果ガス削減が掲げられています。

メタンは温室効果が二酸化炭素の25倍もあり、水田からは日本国内で排出される量の42%を排出しています。

メタンは土壌中に存在する生成菌が、湛水状態を条件に稲わらなどの有機物を原料に発生させますので、中干し期間を通常の2週間より1週間程度延長することでメタンガスの排出削減を行うことができます。
※圃場の乾きすぎにご注意下さい。

■「みどりの食料システム戦略」とは

農林水産省が令和3年5月に生産から販売、消費に至るまでの食料システムを持続可能なものとするため、環境負荷の低減を図りながら、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立を目指し策定したものです。



酸素があるとメタン生成菌は活動できず、メタンを発生することはない。中干しを延長することで酸素が供給されメタンの発生を抑制することができる。